

平成 28 年 8 月 3 日(水)

東京新聞(夕刊)に医療支援(パラオ)の記事が掲載されました

(第3種郵便物認可) 新聞定価 朝夕刊月ごめ 本体価格3,095円(税込み)3,343円 | 部売り(税込み) 朝刊110円 夕刊50円

東 京 新 聞 (夕刊)

水戸が拠点・旧陸軍歩兵連隊壊滅の地

パラオで医療支援へ

市内の眼科医ら「縁を大切に」

太平洋戦争の激戦地ペリリュー島がある南太平洋のパラオ共和国に向け、水戸市の眼科医らでつくるNPO法人「南太平洋眼科医療協会」が四日、医療支援活動に出発する。ペリリュー島は、水戸市に拠点を置いた旧陸軍歩兵第二連隊が壊滅した地。NPO法人代表で、市内で眼科内科病院を開業する小沢忠彦さん(左)は「水戸の眼科医として、縁を感じながら医療活動を展開したい」と語る。

(山下葉月)

協力会からは小沢さんら医師や看護師計七人がパラオに渡り、八月中旬まで滞在。目の診察や白内障の手術を行うほか、水戸市内の高校生らが集めた中古の眼鏡も寄贈する。

協力は、南太平洋のキリバス共和国で二〇〇八年から計五回、住民約一万人を診察、白内障患者約七百人に手術を施してきた。パラオでの医療支援はこの実績が評価され実現。防衛省と米海軍が共同してアジア太平洋地域で医療活動などを行う「パシフィック・パートナーシップ」の公募に選ばれた。

小沢さんは研修医時代の三年間、沖縄県で過ごした経験がある。常勤の眼科医がいない離島を訪れ、往診を重ねた。「南国は紫外線が強く目の病気になるやすく、楽園のイメージが覆った」

「戦争で南の島の人々に多大な迷惑をかけてしまった。志半ばで散っていった日本の若者もいた。彼らの霊を弔いたい」と話している。

沖繩の離島での経験から、医師が思わず、医療支援が必要な南太平洋の島国を探し、キリバスに眼科医が一人もいないことを知った。「少しでも多くの人を助けたい」と、キリバスで活動するため、NPOの前身となる団体を〇五年に設立した。

キリバスでは旧日本軍の司令塔跡に銃弾の痕が生々しく残り、その近くで住民たちが日常の生活を送っていた。小沢さんは「笑顔で接してくれるが、内心は違うのではないか」と感じた。今回、医療支援に向かうパラオ共和国には、戦後七十年の昨年四月、天皇、皇后両陛下が慰霊のため訪問している。水戸市によると、ペリリュー島で日本兵約一万人が戦死し、帰還できなかったのは三十四人だけ。同市出身者も多く犠牲になった。小沢さんも、親戚からペリリュー島の話を聞いて育った。

「戦争で南の島の人々に多大な迷惑をかけてしまった。志半ばで散っていった日本の若者もいた。彼らの霊を弔いたい」と話している。

パラオでの医療支援への思いを語る小沢忠彦さん(左)水戸市内で昨年9月、キリバスで眼科診療する小沢さん(右)小沢眼科内科病院提供

パシフィック・パートナーシップ米海軍を主体とする艦艇が、アジア太平洋地域の国々を訪問し、医療支援、土木事業、文化交流を行う。2007年に始まり、今年で10回目。フィジーなど9カ国で活動してきた。今年には自衛隊やNPOから約250人が参加し、6月13～8月24日の間、東ティモール、ベトナム、パラオ、インドネシアの4カ国で活動する。

